

第六章

CONTENTS

中瀬鉦山

なかぜ

日本一の自然金とアンチモン

なかぜ
中瀬金山は、天正元年（1573）、
やまがわ
八木川の大日淵で砂金が発見された
ことが契機となり、現在の石間歩坑
口付近で金鉦脈が発見されました。
天正13年、天下を統一した豊臣秀
吉は、中瀬金山を直轄地である蔵
入地としました。そして、豊臣大名
である、八木城主別所重棟、続いて



石間歩坑口。天正2年(1574)、中瀬で初めて開かれた間歩(=坑道)。その後も、昭和44年の閉坑まで主要坑道の一つとして活躍した。※坑口前への立ち入りには許可が必要

別所吉治に代官を命じました。江戸時代になると徳川幕府の直轄地となり、生野奉行間宮直元が支配しました。中瀬の北側にある高台に陣屋(金山役所)を建設し、下奉行(上代)を派遣しました。金山の開発と経営を推進し、近畿地方でも最大の金山町として開発しました。明治5年(1872)には、神子畑・明延とともに官営鉦山となりました。その後、但馬地域の鉦山は農商務省生野鉦山分局、宮内省御料局と所管が変わり、明治29年には生野・神子畑・明延とともに、三菱の経営となりました。昭和10年、日本精鉦株式会社が経営を開始しました。金とアンチモンを産出する近代鉦山として発展し、昭和10年から昭和44年までの34年間で金約7.3トンを生産しました。通常、鉦石に含まれる金の粒子は10マイクロメートル(0.01ミリメートル)ほどの小さな粒子です。しかし中瀬鉦山の自然金の中には長さ7センチメートルもある棒のような結晶があり、日本最大の金の結晶として、アメリカの Smithsonian 博物館でも展示されています。金は、1トンの鉦石に5グラム程度の含有量があれば採算がとれます。

したが、採掘可能な鉦脈の金の含有量が減少した結果、昭和44年に採掘部門は閉鎖しました。採掘部門の閉鎖後もアンチモンの製錬は継続され、現在は世界的にも最高品質のアンチモンを製錬して、国内生産の80%以上を占めています。(アンチモン…硬くてもろい銀白色の元素。古代には顔料として使用されていた。現在は触媒や減摩材、ガラス清澄剤などの材料として用いられる。)

COLUMN

鉦石運搬車
「ナベトロ」

中瀬金山関所横のトロッコ広場には中瀬鉦山で昭和44年(1969)まで使われていた鉦山車両を展示しています。地下の坑道では酸素が大切です。空気が汚れるガソリン機関車は使えないため、バッテリーを搭載した蓄電池式機関車が活躍しました。また、鉦石の運搬車両、通称「ナベトロ」は兵庫県内に唯一残っている車両です。



中瀬陣屋と3つの口番所

慶長5年（1600）、徳川家康から任命された生野奉行間宮直元は、中瀬金山役所の普請を命じた。記録では役屋敷（陣屋）と2軒の上代屋敷、3カ所の門（八木口門、大屋口門、足坂口門）と、その門番の住居が各2軒、牢屋や米蔵も造られました。中瀬の町は、3つの出入口に門番を置く鉦山町として町並みや水路が整備され、中瀬の町で金の製錬を行いました。当時製錬で使用された石臼が、現在も町中に点在しています。



現在の中瀬鉦山跡

中瀬鉦山の近代化

昭和10年、日本精鉦株式会社を経営に移つてからの中瀬鉦山は、金とアンチモンの鉦石を産出する近代鉦山として発展しました。

昭和12年（1937）に1日の処理能力が1000トンの機械式選鉦場を建設し、昭和13年には坑道の排水用にディーゼルエンジンによる5馬力ポンプを建設しました。昭和15年に万寿堅坑が貫通し、金鉦石の生産が増加しました。昭和18年には



現在の中瀬鉦山跡



昭和初期の中瀬鉦山



昭和20年代の不要な石を運搬する様子

30馬力のコンプレッサーが導入され、新しい金鉦脈を掘り始めました。

金鉦石は中瀬鉦山で粉碎して細かく砕き、比重の違いや浮力を利用して、銀を含んだ青金になるまで選鉦しました。その後、選鉦した金はトラックで山陰本線養父駅に運んで鉦石専用のプラットフォームで貨車に積み込み、姫路市飾磨駅まで鉄道で運び、さらに飾磨港から船で三菱金属鉦業株式会社直島製錬所に送つて製錬し、純金のインゴットになりました。

昭和23年、アンチモンの産出量は

全国の73・1%を占め、金は全国第5位の産出量となりました。アンチモン専用の製錬所を建設し、一貫作業を進めました。選鉦場のほかに変電所、鉄工所、木工所、分析所を整備しました。こうした技術が現在の三酸化アンチモンの製造へと結びつきました。現在、三酸化アンチモンは不燃材として、生活用品になくてもならない原材料となっています。

日本精鉦株式会社は、昭和10年から昭和44年までの34年間で、金約7・3トン、銀約38・97トン、アンチモン約6000トンを出鉦しました。

WALK
MAP

中瀬 なかぜ MAP



宝引山(803m)



金の鉱石を砕いた石臼



中瀬鉱山の自然金
レプリカ展示



2 陣屋(金山役所跡)



天正10年(1582)、豊田秀吉配下の奉行によって、この付近に金山屋敷が建てられた。江戸時代に入った慶長5年(1600)、徳川家康配下の生野奉行・間宮新左衛門によって、ここに金山役所、役宅、米蔵、牢屋が建てられたと伝えられる。享保8年(1723)に役所は廃止されたが、その敷地と古い石垣が今に残る。

1 中瀬金山関所(トロッコ広場)



まちの交流拠点施設。鉱山関係資料の展示の他、隣接するトロッコ広場には、鉱山稼働時期に使用していたトロッコを常設している。

中瀬周辺MAP



中瀬金山町を歩く

中瀬は東西700m、南北350mの範囲にあります。長方形街区を伴う町並みがあり、人工的に引かれた水路が廻ります。豊臣政権期から江戸時代初期にかけて、鉱山都市として整備されています。うだつの並ぶ街道北側の高台に陣屋跡があります。金光寺・大日寺・金昌寺・宝泉寺・常運寺の5寺院は中瀬が金山町として繁栄した証です。



うだつの上がる
中瀬の街道



4 石間歩坑口

天正2年(1574)、中瀬で初めて開かれた間歩(=坑道)。その後も、昭和44年の閉坑まで主要坑道の一つとして活躍した。
※立ち入りには許可が必要



金昌寺

曹洞宗で慶長14年(1609)



金光寺

浄土真宗で寛永3年(1626)には存在



宝泉寺

日蓮宗で文禄2年(1593)



常運寺

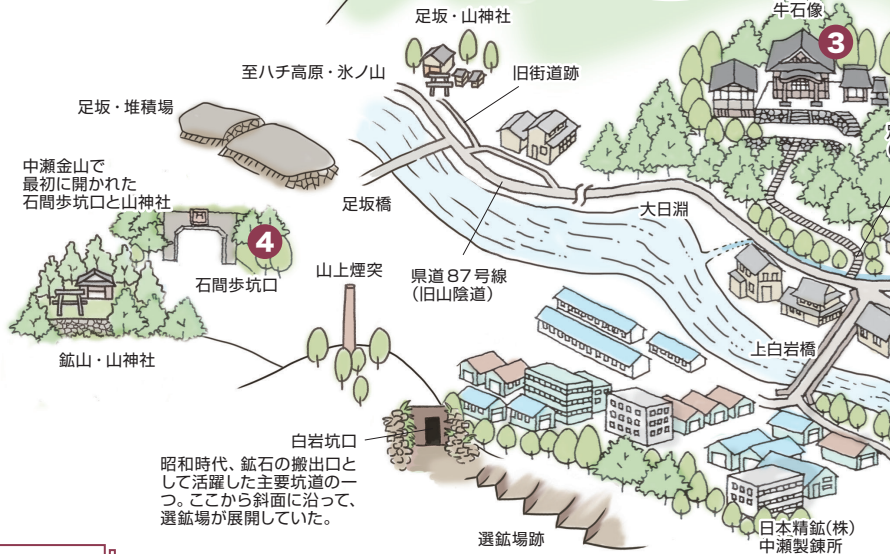
浄土宗で寛永元年(1624)

この寺の下の「大日淵」で砂金が発見されたことで、中瀬金山が見つかった。牛石像があり、農家が牛を飼っていた頃の「大日祭り」は大層な賑わいだった。

3 高瀬山大日寺



大日寺
牛石像



昭和時代、鉱石の搬出口として活躍した主要坑道の一つ。ここから斜面に沿って、選鉱場が展開していた。

町の中を流れる水路



中瀬町歩きガイド - DATA -

町歩きはガイドと一緒に歩くのがオススメです。
町中に点在する見所を説明してもらいながら、江戸時代に整備された町を歩きます。事前申し込みが必要です。
◆兵庫県養父市中瀬 ◆ガイド1人につき2,000円(10名程度につきガイド1名) ◆1時間程度(見学内容・時間は相談に応じます)
(問) 養父市役所関宮地域局 079-667-2331



八チ高原 THE PARK

八チ高原は、四季折々の大自然のパノラマが広がる西日本有数のアウトドアエリアです。八チ高原 THE PARKではキャンプやグランピング、その他アクティビティを運営。ご家族やご友人と大切なひと時を過ごすことができます。

[所] 養父市丹戸宇越中881-1
[時] チェックイン14時~チェックアウト10時 [期] 4月末~10月末
[問] (直通) 080-8894-7312、(管理) パークホテル白樺館 079-667-8001



山田風太郎記念館

「魔界転生」、「甲賀忍法帖」など映画、テレビ、舞台、マンガ・アニメなどで、今なお多くのファンを魅きつける作家・山田風太郎は、大正11年、兵庫県養父郡関宮村(現養父市関宮)の生まれです。館内では書斎の一隅を再現、数々の資料を展示しています。近くに現存する生家もあります。

[所] 兵庫県養父市関宮605-1
[時] 9~17時(入館は閉館の30分前まで) [料] 大人300円、小・中・高校生100円 [休] 月曜(祝日の場合は翌日) [問] 079-663-5522



PEAKS café

国道9号線沿いの関宮地域にある羽瀨精肉店が展開しているお洒落なカフェ。自家焙煎コーヒーと、国産黒毛和牛を使用したハンバーガーを楽しめるお店です。外にはテラス席もあり、ゆったりとくつろぐことができます。

[所] 養父市関宮266
[時] 11~L.O16時(当日16:00までに連絡あれば16時以降も商品お渡し可) [休] 月曜、第3日曜
[問] 079-667-3464



道の駅ようか但馬蔵

蔵をイメージしたゆとりの空間と、地元の果物や野菜など品揃えが豊富な道の駅です。蛇紋岩米や八鹿豚などの特産品を使った料理を楽しめるお食事処もあります。足湯もあるので旅の疲れも癒されます。

[所] 養父市八鹿町高柳241-1
[時] レストラン: 11~16時30分(土曜は18時30分、日・祝日は19時まで)、テイクアウト: 9~17時15分(土・日・祝日は17時30分まで)、売店・野菜蔵: 9~17時30分(土・日・祝日は19時まで)
[問] 079-662-3200

近隣ガイド